

京三中・山城高同窓会 会誌

# 双ヶ丘



## 目次

人は人に会うために生きている  
回思「不踰矩」

#### 裏表紙コメント

スキー研修旅行を引率して、長野県の志賀高原に行ってきました。長野県の風景を描いた画家として有名なのは、東山魁夷だと思います。巨匠が思い描く信州の風景をイメージしながら、撮影をしました。

タイトル：《静晨の響き》

撮影日：平成24年1月27日

撮影：公民科 教諭 渡邊 一郎



## 学校だより

「人は人に会うために生きている」

学校長 北沢 和夫

私たちは生涯どれだけ多くの人に巡り会い、語らい、そして別れを積み重ねていくのでしょうか。まさに人は人と出会うために生きている、人生とは人と出会うことであると言えます。そして学校こそ、まさに出会いと別れの繰り返しの場です。

私の手元にいつも置いている大切なものがあります。それは教壇に立っていた間、三年生が卒業前に書いてくれたもの、あるいは担任をした子どもたちが贈ってくれた言葉の数々です。B6判の用紙で3,000名分はあるでしょうか。長い教職生活をふりかえってみて「出会いの仕事」だったなあと、あらためて思います。私が関わった数え切れないほどの多くの子どもたちそれぞれの内面に「私」がどのように映じ、継承され、あるいは陶冶されたのか、私にはよくわかりません。ただ、子どもたちが残していったメッセージを通していつも感じることは、子どもたちはいつも私から発せられる言葉を心のどこかでいつも待っていてくれたのだなあとということです。私はそのことを支えにして、これまでこの仕事を続けられたのだと思っています。ですから私自身もまた、出会った子どもたちによって、卒業していった後も、ずーっと励まされ続けていたのだなあと、今しみじみ思います。

私たちの仕事は、日々子どもたちを励まし、力をつけて、自信をもたせることでありますけれども、それは子どもそれぞれに、そして時と場面に応じての、絶妙の「語りかけ」によって成り立っています。すなわち言葉の力によるところが大きいのです。加えて素晴らしいことには、子どもたちすべてに対して、わけへだてなく、心を尽くして、言葉によって一人一人全員に「力」を与えることが可能であるということです。教職に携わる者はいかなる時代、社会になろうとも、このことを忘れてはいけない——後輩へ託す言葉です。

山城高校での三年間、子どもたちだけでなく多くの人々と出会うことができ、私の人生をより豊かなものにしていただいたと感じています。力を添えて頂きました森会長をはじめ同窓会の役員の方々、多くの会員の皆様に厚く感謝の意を表します。有り難うございました。

---

## 回思 「不踰矩」

中村 弘通

もう五十年以上前のことだが、街には貸本屋があり、水木しげるの『墓場鬼太郎』だとかがならんでいた。

——幼心にも凄い絵だと思ったが、後日にTVアニメになってもはやされ、終には作者の人生までがTVドラマ化されるなどとは想像だにできない、なんとも暗い物語だった。分からないものだ、人生とは——

そういう所へ近づいてはならないと咎める親の眼を盗んで見た貸本漫画の中で、水木の作品以上に強い印象を受けたのが、最早画家の名前も分からなくなってしまったが、岩下俊作の小説『無法松の一生』を漫画化したもの。

——因みに、この小説は伊丹万作監督、板東妻三郎主演の映画でも随分評判になったというのは読者諸兄姉ご承知のこと。私はその映画を後に見て、これもまた強い印象を受け、記憶に残った。さらに後年、この山城高校で「阪妻」氏のご子息、田村高廣氏に会う機会が何度かあり、氏の風貌が、スクリーンの中の彼の「阪妻」氏にそっくり——これも読者諸兄姉ご承知のこと——なのに驚いた——（高廣氏の出演作では私的には『泥の河』が無上に好きだ。あの、春風駘蕩たるお人柄！だった田村高廣氏、追悼）——

話が逸れた。その漫画の中で「無法松」こと富島松五郎が、「吉岡のぼんぼん」こと「吉岡敏雄」に、「人生とは」と語って聞かせる場面が、コマ数段抜いた枠の中に、一本の曲がる帯のような構図に乗せて描かれていた。敏雄はまだ中学生くらい。さらにその敏雄が成人し社会に地位を得てから、仕事に励まぬ小使いの少年に、「一生懸命生きても松五郎さんのように恵まれない人生もあるものだが、人間は常に懸命に生きてこそなんだ。いや、君には分かるまいが……」などと語るシーンでも同様の構図があった（と記憶する。なにしろ五十年以上前の記憶であるが）。

まあ、人生とは、そんなものかな？と、教員人生を終える今、思う。過ぎてしまえば、人生とやらが一本の帯のように見えなくもない。

この漫画本を見て、そう間が無い頃だったと思う。家に、簡野道明の『論語精解』があるのを見つけた。我が家では私の妹、兄、近所でも幼なじみが相次いで亡くなり、家の中にも外にも暗い気分が漂っていた。毎月の命日には僧が来て読経し、耳が慣れた。それで覚えた経文を子供の私も口ずさみ、論語もルビが振られた書き下ろし文なら、意味がわからずとも音読してみれば経文同様、何度も繰り返し読むうちに身に沁みだ。

子曰はく、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。

---

---

五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰へず。」(為政篇第二)

あろうことか、十五歳の春、高校入試に失敗した。そこから「志学」を思い、歩き出すまで随分苦しい思いをし、時間もかかったが、せめて三十までには他との遅れを取り戻そう、そこまでは「学」に勤しむのみと思い定めた。

図らずも「三十而立」、教員になり、今日に及んだ。教員になろうと思って歩んだその道ではなかったが、爾来、かつて自分が陥った暗い道を、「後生」に——彼らは「生徒」ではなく、時に「師」でもある、人生の同伴者だったが——歩ませないように、「先生」として、私なりの努力をして来たつもりだ。その際、何かにつけ思い出したのは、曾子の言う「三省」末尾、「習わざるを伝へしか」。自分が未だ習熟せざるものを伝えることのないようにということ。

——その読み方は、私自身が高校生の頃に習ったものだ。あの頃に学んだものからは、真に大きく深い影響を受けたものだなど改めて実感する——。

しかし、私に「不惑」や「知命」があったか？「惑」い続け、これが「命」なのかと天を仰ぐ事は再々だった。ましてや「耳順」、「従心所欲、不踰矩」など言うもおこがましい。

ただ、横断歩道の無い場所を渡るのが嫌いになった。危険だからではなく、「範」たろうとしていたのでもない。つかうかかと、「踰矩」しかねないので「生徒が見ていたら」と、常にその目をもって我が身を「三省」することをしていたら、それがいつの間にか身に沁みて嫌いになっただけである。私の「不踰矩」は、未だその程度である。

---